

本研修会の自己評価のルーブリック

	授業開発の支援者 ファカルティ・デベロッパー (2ポイント)	授業開発の実践者 アクティブ・ラーナー (1ポイント)	初任者教員 (0ポイント)
①大学教育についての「気づき」が共有できる	自分の目の前にいる学生に対して、講義・学生支援を通して、学生がどのような躓きを感じているか、自分の言葉で明らかにできる。	講義・学生支援を通して、学生の様子の変化や成長を実感できる。	講義・学生支援を通して、学生の成長に気づくことができず、改善の手立てが見当たらない。
②5年後の教育開発のイメージが持てる	キーワードをもとに、教育開発に必要なFDツール(ディプロマポリシー、シラバス、ルーブリック)を説明でき活用できる。	大学改革に必要なFDツールのいくつかについて理解できる。	FDツールについて必要性がないと考え、教育開発のイメージを持たない。
③学内外の現状を分析・整理し、理解できる	中教審答申・文科省施策や内外の状況から、大学にいま求められている「学習の主体」の転換、授業手法の開発の位置づけを説明できる。	「学習の主体」の転換について理解し、授業手法の開発の必要性が分かる。	「学習の主体」は講義を行う教員にあるため、授業開発や研究を教員個人で十分行うことができると考える。
④学生の学びのための教育開発の支援者となる	カリキュラムにおける学修目標を設定し、個々の科目の重要性和関連性を説明できる。	自分の科目の学修目標を設定し、学生の到達度を測ることができる。	学生の学修目標ではなく、教員の教育目標を中心に講義・学生支援を行う。

生命科学の自己評価ルーブリック

生命科学（前期・2単位）では、①専門科目の基盤となる生物学の知識について理解を深める。②生物学的なものの方・考え方を身につけ、人体の構造と機能に関わる基礎知識を確実に修得する。③それだけにとどまらず、新しい知見についても触れ、生命現象に対する科学的倫理観を養う。という教育目標のもと、次の到達目標に沿って講義の成績評価とします。

	素晴らしい！（4ポイント）	もう少し！（2ポイント）	がんばろう！（0ポイント）
①知識：講義で生物学の知識が身に付いている	十分に学習（復習）し、知識を他人に説明できる。	まあまあ復習できており、キーワードを思い出せる。	復習が十分ではなく、キーワードがほとんど理解できなかった。
②理解：生物学のものの見方を手に入れる	記述問題に、自分の言葉を使って答え、正しい解答に近づいた。	記述問題に、授業プリントの書き方を参考に、キーワードで解答を表現できた。	記述課題に、解答できなかった。
③思考：生物学の考え方を身に付ける	各回の授業での問いを立て、授業内に自分なりの答えを導き出した。	各回の授業で問いや疑問点が生まれ、コメントできた。	出席カードに何も書かなかった。
④判断：人体の構造と機能に関わる課題解決ができる	中間テスト、期末テストでの記述課題に自分の言葉で具体的な答えを導き出した。	中間テスト、期末テストでの記述課題にキーワードで答えることができた。	テストでの記述課題に答えられなかった。
⑤関心：生命現象に対する科学的倫理観を養う	自分の興味をもった課題を見つけ、ミニレポートとして成果を提出し、十分な内容に仕上げた。	自分の興味のある課題を見つけ、提出を目指したがミニレポートは不十分であった。	課題が見つけられず、ミニレポートも提出しなかった。

ワークショップに用いる用語： ルーブリックの4要素

- 課題 … 課題内容
- 観点(学修規準) … 課題に必要なスキル
- 尺度(基準) … 評価のレベル(3～5段階)
- 評価基準 … 観点と尺度により規定される内容

課題：			
	レベル3(優)	レベル2(良)	レベル1(可)
観点1 (10pt.)	…	…	…
観点2 (20pt.)	…	…	…

評価基準

ワークショップのために

- 事前に考えてきていただきたいこと
(シラバス、これまでの授業実践・教育支援から)
 - あなたの授業での成績評価は？
(タイミング、方法、基準、コスト、課題設定の理由・根拠、採点結果・成績分布)
 - 学生に何を期待し、なぜその課題を与え、そのとき何が起っていたか？
 - あなたの講義・実習・実験・ゼミを通して成長してほしい「卒業生の姿」「学修成果」は？

課題:

観点\尺度	(レベル3)	(レベル2)	(レベル1)

ループリツクとは何か

金沢大学 大学教育開発・支援センター准教授

杉森 公一

大学教育の質保証ツールとして

大学教育の質保証に向けて、中央教育審議会の一連の答申、大学改革実行プラン、教育再生実行会議（第三次提言、第四次提言）と矢継ぎ早に、学習成果としての学士力の測定と可視化を含めた教育改善プロセスを求めている。特に平成二十四年八月の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質転換に向けて」では、シラバス、ナンバリング、アクティブラーニングと並んで、「ループリツク」が初めて登場した。

体系的な学士課程プログラムの確立に資する、具体的な「教育改善のための道具立て」に役立つとされるループリツクであるが、中央教育審議会大学分科会大学教育部会（第二五回、平成二十五年九月二十日）提出資料1において鈴木典比古委員が次のように述べている。

「ループリツクは教員と学生双方が使用で

きる学習進捗表であるが、実際の授業においてはこのループリツクと、授業の進行工程表であるシラバスはセットになって使用される必要がある。（中略）ループリツクは学生の主体的な学習への取り組みと自己による達成度評価を可能にする道具として有効である。」

ループリツクとは、果たしてどのような役割を果たす道具なのであろうか。

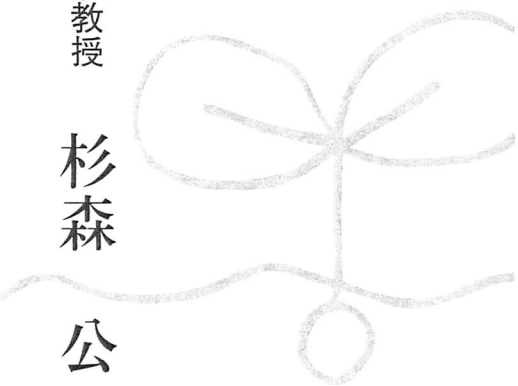
ループリツクとは何か

ループリツク (rubric) の語源は、ラテン語の rubrica Ⅱ 朱書きの意からきており、重要箇所や目標を強調する宗教用語としての歴史がある。ひとつの講義においても、事前に提示するシラバスによって、講義の目的、各回の授業内容、成績評価方法と基準を明らかにし、学生の学びを促す方策が定着してきた。しかし、どのような能力をどの段階まで求めるのか、という学修成果（ラーニング・アウトカムズ）を達成度として示し、学生と教師

が相互に確認し合うことなくしては、明確な成績評価には至らない。

観点別目標と絶対評価が導入されてきた初等中等教育では、ループリツクを用いた教育実践が先行している。学修成果の観点は、ブルームによる分類学・認知領域（知識・理解、思考・判断）、情意領域（関心・意欲、態度）、精神運動領域（技能・表現）の三領域に準拠することが多く、それぞれアタマ・ココロ・カラダへ対応させるとイメージしやすい。

しかし、単に知識を問うのであれば、筆記試験のような「客観テスト」で十分であり、ループリツクが示す評価基準表は、能力・スキルの質を問う「パフォーマンス課題」の形式的な評価に対応している。複雑でリアルな状況の下で能力が活用された状態をパフォーマンスとして問うこと、学校知が真正性を帯びるかどうかに注目する意味で「真正の評価」の方法とも呼ばれる。知識基盤社会の到来を背景に、社会人基礎力、キー・コンピテンシー、



学士力といった新しい学力観が要請される時代において、アタマだけを評価して学修成果のすべてとはせず、ココロ・カラダのパフォーマンスにも注目したい。

ルーブリックの基本要素

ルーブリックは、課題、観点(学修規準)、尺度(基準)、評価基準からなる(図)。設定された課題の内容に応じて、各行にいくつかの観点が示され、三〜五段階の尺度で分割されたマトリックスに、高レベル〜低レベルに応じた具体的な到達度が例文で記述される。

"Introduction to Rubrics 2nd ed." (Stevens

ルーブリックの4要素

- 課題 … 課題内容
- 観点(学修規準) … 課題に必要なスキル
- 尺度(基準) … 評価のレベル(3〜5分法)
- 評価基準 … 観点と尺度により規定される内容

課題:			
	レベル3(優)	レベル2(良)	レベル1(可)
観点1	…(具体的な状態を記述する例文)	…	…
観点2	…	評価基準	…

図 ルーブリックの4要素

& Levi, 2013) によれば、作成の手続きは、①課題の振り返り、②学修成果のリスト化、③観点の分類と命名、④ルーブリックの作成——の段階を踏む。レポート課題の例で、具体的に考えてみたい。①過去に提出されたレポートとその評価を振り返り、学生に何を期待し、なぜその課題を与え、そのとき何が起こっていたかを明らかにする。優れた評価レポートの共通項から、評価者の主観が明らかとなる。評価者が複数いる場合には、評価の共通点と相違点が見出されるだろう。②完成された課題に求める学修目標に焦点を当てる。どのような能力、観点が存在し、その到達点の高さ・深さについての情報を得ることが、この段階で求められる。先行研究レビューに基づいて論点を明確にしているか、複数の具体的な根拠を示しているかなどの課題に対する高い期待をリスト化する。③そのリストを、いくつかの観点にグループ分けする。ブルーム分類に沿って観点を分割し、その特徴を表すスキルを命名する段階である。④尺度をいくつかに分割するかを決定し、分割した尺度ごとの評価基準を、観点×尺度のマトリックスに記述することによって、ルーブリックは完成する。教師自身で作成するだけでなく、同僚やTA(ティーチング・アシスタント)と一緒に、または学生と一緒に作り、課題を課す前に学生と共有されることが必要である。教師と学生が互いに納得することが、評価基準に基づいた公正な評価につながる。複数の教師が担当する科目では、教師間の評価基準

の共有も可能となる。

シリーズの開始にあたって

学生の成長を担うのは、各教育機関の教育プログラムであるが、初等中等・高等教育の各段階の間、そして社会との間に深い谷が存在してはいないだろうか。大学と社会は、入学試験あるいは就職試験、国家試験など、教育の入口と出口の質保証を目指す方法を模索してきた。だが、ルーブリックには書かれていない、レベル0が存在する。図に例示した、レベル1からレベル3までの達成度を評価することによって、機関内の教育の質保証に効果があるかもしれない。しかし、前教育段階のレベル3と、接続する教育段階のレベル1を合わせていくこと、教育接続のための長期のルーブリックを書くことが必要ではないだろうか。

本連載では、教育接続の課題に向き合って実践されている教育者・研究者に、ルーブリックを試行することによって、改めて教育接続を捉えていただくことを意図している。高大接続(入学前教育、初年次教育、リメディアル教育)、学生支援・学習支援、サービスマラニングによる地域との接続、社会との接続、医療・保健分野での臨床現場との教育接続に焦点を当て、今まさに実践を始めようとしている、いくつかの大学教育の取り組みを事例として取り上げ、ルーブリック試行の息吹をお伝えしたい。

大学教育を取り巻く教育接続の課題

金沢大学 大学教育開発・支援センター准教授

杉森 公一

ループブリックの効果の実際

前回示したように、観点(学修規準)×尺度(基準)のマトリクスとして描かれるループブリックは、質的な評価が求められるパフォーマンス課題のために用いられ、学生に事前に提示し、教師と共有することで高い効果を発揮する。また、実践を通じ、状況に合わせて改訂され続ける。教師間で、科目間で、大学間で同じ課題を用い、ループブリックと学生の成果物を持ち寄って調整する「モデレーション」が、観点の不備や尺度間の飛躍を補正する有効な方法のひとつである。逆に、既存の実践から共同開発された汎用ループブリックから、個々の大学・学科・科目のループブリックの作成を支援する試みもある。全米カレッジ・大学協会(AAC&U)によるVALUER(ループブリックは、教養教育によって形成されるべき能力を抽出し一五領域についての長期的なループブリックとして作成されている。VALUER

UEループブリックを参考に、大学・学科・科目の文脈に合わせてローカライズして活用される(松下佳代「パフォーマンス評価による学習の質の評価―学習評価の構図の分析にもとづいて」京都大学高等教育研究一八号七五―一四頁二〇一二年)。

実際、従来の教育評価とどのように異なるのか、使えるものなのだろうか。

筆者は、この一年間にわたって大学初年次のために担当した科目のすべてで、ループブリックによる評価を試行した。導入科目(生物学)、初年次教育科目(アカデミック・スキル)、一般教養科目(大学論など)と対象となる学生も異なっていたが、総じて教育者側の評価観点と学修基準は、学生と共有されたことを実感した。執筆時のちょうどいまレポート課題の採点を終えたところだが、内容と質のばらつきは減少し、基準に満たないレポートは見られなくなった。事前提示し内容を確認する工夫として、初回授業でのシラバスレビュー

形式でグループ討論を取り入れた対話、課題のフィードバックによって授業後の自律的学習につなげることが望ましい。ループブリックは学生自身で使うことも有効であり、自己評価による省察は、一コマ単位での形成的なふりかえりでも、最終回に自己評価を行う形でもよい。結果として、教育・学習の質の変化と、学生自身のふりかえりを支援する効果が、学生の主体的な学びへつながることが期待できる。

学生の学びをパフォーマンスとして捉える

客観テストだけでは測ることが難しい、高次の学習目標と形成的な評価についても、ループブリックが負うものは大きい。情意領域の目標や、体系的な概念の形成を問う学びの形成そのものをパフォーマンスとして捉えることで、日々の授業での討論やミニッツペーパー回答の質、記述式のテストの文量と質も向上する。単位授与を総合的なペーパーテスト、

フィードバックをしないレポート課題のみで行うことは、場合によっては成績基準の厳格化や公正さとみなすことはできず、一過性の評価にとらわれた学生の「浅い学び」を誘うことになる。もし知識・理解を越えたところに、授業目的と学習目標を置くならば、学習意欲と主体性を含む学びのパフォーマンスに關してもルーブリックを作成できる。

アクティブ・ラーニング（学生参加、PBL、協調・協同学習を含む、能動的活動を促す講義法の総称）型の授業において、パフォーマンス課題は効果を発揮する。グループでの学びを取り入れた場合にも、学生の自律的主体的な学習活動が求められる。学習方法と役割をあらかじめ提示せずに協同学習を始めることは困難であり、活動に關与しない学生の存在すら出てくるだろう。

教育段階の間にある深い谷

大学においてルーブリックによる教育実践は始まったばかりであり、日本での評価モデルが確立されているとは言いが切れない。さらに、他校で成功したルーブリックをそのまま持ち込んだとしても成功するとは限らないことは、VALUEルーブリックの例が表している。学生と教師の学習進捗を確認するために、自らの手で書くこと、実情と学問分野に沿った形へ書き直すことによって、高い効果を得ることが出来る。また、VALUEルーブリックの特徴として、四段階の尺度・レベル1（ベンチマーク）↓レベル2・3（マイ

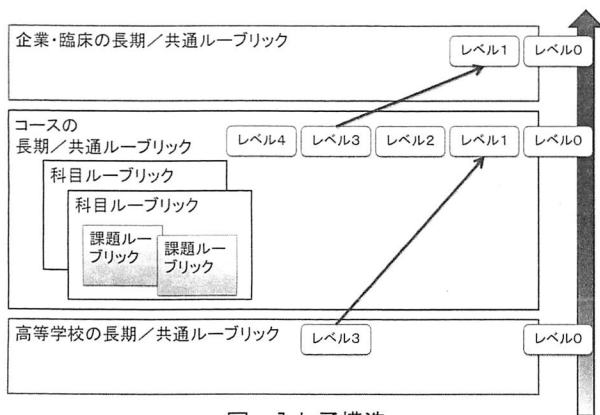


図 入れ子構造

ルストーン) ↓レベル4 (キャップストーン) で書かれ、学士課程の学年に対応できるように表される。ただし、ベンチマークに満たない「レベル0」から、マイルストーンを刻めないために、ルーブリックの最終レベルに到達できない課題、学生も存在する。それ以前の教育段階・科目でのキャップストーンは妥当であったのか、評価指標と教育方法がすれ違いながら、学びの形成がおざりになって、前教育段階でのキャップストーンが達成されたという錯覚が教育者の自己満足に陥っていないだろうか。

筆者は、教育段階の間にある深い谷は、評価指標の接続の不足に起因すると考えている。教育接続の課題として、教育段階の境目、例えば入試あるいは国家試験・就職試験が十分

な機能と役割を果たしているかには、議論が繰り返されてきている。また、大学内部でも個々の科目間の連携、初年次の一般教育・基礎教育

と後年次・専門教育、学部教育と大学院教育、それぞれの間に教育接続の問題が隠れており、カリキュラムの体系化を阻む要因となっている。

ルーブリックの入れ子構造を図示すると、教育段階の狭間にまたがる、長期ルーブリックが不在であり、レベル0が谷間となる。たとえば、高等学校での卒業までに身に付く学習成果は、大学入学時に必要とされる能力と厳密に等しいものではないことが考えられる。大学入試で知識・理解のベンチマークを問うているはずなのに、いまや、初年次教育はアカデミック・スキルのリテラシー教育・転換教育として根付き、リメディアル教育（高校までの内容の補習教育）は何らかの形で多くの大学が実施する情勢にある。高大接続の抜本的な改革の議論は、幼保から小中高大にわたっての連続（K-16）が分断されていることの顕在化であろう。さらに、学校卒業後の生涯にわたっての自律的教育・学習にも、長期ルーブリックが果たす役割が一層重要となる。地域・企業で学ぶサービスマスター・ラーニング、医療・介護・教育現場での実習教育は、職業と密接に關係し、卒後にわたる新人教育との教育接続が困難になりつつある。ルーブリックの適用範囲の延長、ベンチマークとキャップストーンの擦り合わせによって、教育段階にまたがって存在する谷間を可視化すること、評価者（教師、指導者など）同士の共通理解が進むことが、大学教育内外の教育段階を結ぶ第一歩になると考えている。